

第1回(2008.10.21 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「10月は収穫の月」

10月は神無月(かんなづき)とも言うが、この語源にはいろいろな説がある。一般的に言い伝えられているのは、日本国中の八百万(やおよろず)の神がみんな出雲の国に行ってしまう、留守にするからだと言われている。そこで出雲の国だけはこの月を神有月(かみありづき)と呼ぶ。なぜ出雲の国に集まるかと言えば、それぞれの国における男女の縁談について、国神たちが出雲大社にて協議し定めるからだと言われている。旧暦の10月は、農村では収穫が済んで農作業も一段落し、結婚ラッシュとなるから神さまたちも大忙しで、だから出雲大社に出向いて情報交換や取引などをするのかもしれないが、この月は収穫を祝い神に感謝する月だから、神様が不在では困る。そこで、神さまは月の初めの一週間だけ出かけているのだそうである。神様の世界もご苦労なことだ。

また、「かんなづき」の語源は、神様ではなく雷だという説もある。その説によると、6月は水無月(みなづき)というが、雷が鳴り始める季節だから雷鳴月(かみなりづき)だという。これに対して10月は雷があまりないから雷無月(かみなしづき)と言ったことから、「かみなづき」になったという説である。さらに、醸成月(かもしなりづき)が「かみなしづき」になった、という説もある。これは、10月に行われる神嘗祭に供する新酒を造る、すなわち新米で酒を醸すことからきたのだという。神嘗祭とは、その年に収穫した新米を神様に捧げて感謝する行事だが、たとえば伊勢神宮では10月15日から25日にかけて行われるもっとも重要な神事である。

この翌月、11月23日は、宮中で天皇陛下が新穀を神に捧げて感謝する新嘗祭(にいなめさい)が行われる。戦前は、国家の最高責任者である天皇が国民を代表して行う神事だったから祝日となっていたが、敗戦と同時に皇室中心の政治から民衆の政治へと変貌するにあたって、今日では「勤労感謝の日」というもっともらしい名称を付けて休日になっている。勤労とは、辞書によると「心身を労して仕事に励むこと」とある。ふだん勤労しない者は休日の権利がないのは言うまでもない。

このように、10月は収穫の月だったから、各地の神社仏閣で収穫祭が行われた。恵比寿講もそのひとつである。これは、江戸時代における民間年中行事の一つで、毎年10月20日に各商家が蛭子(えびす)の像を祀り、商売繁盛を祈願して宴を開いた行事である。そもそも蛭子は、七福神の恵比寿様のことだが、この神さまは農村では田の神であり、漁村では漁の神だし、商家では商売繁盛の神さまとして祀られていたから、これら信者の集まりを恵比寿講、この祭りを恵比寿祭と言う。恵比寿様は、春を迎えると山を下って里にやってきて、収穫が終わるとまた山に帰ると言われているから、旧暦の1月と10月に恵比寿講(祭り)が行われるようになった。恵比寿様は水蛭子(蛭子神)だといわれている。『古事記』によれば、高天原(たかまがはら)の神々が、男神・イザナキノミコト(伊耶那岐命、日本書紀では伊弉諾尊)と女神・イザナミノミコト(伊耶那美命、日本書紀では伊弉美尊)を下界に使わされて、日本列島を造ったという。最初に生まれたのが淡路島で、次に四国、隠岐の島、九州、壱岐の島、対馬、佐渡、最後に本州が造られた。最初に、イザナミがイザナキに向かって、「なんといい男なんだろう」と言い、その後でイザナキがイザナミに「なんといい女なんだろう」と言ってから契ったので、出来た子供(島)は不具で、次の子供も満足な島にならなかったという。そして、立場を逆にして、男であるイザナキから先に言葉を発したらいい島ができた。このことから、女性から先にプロポーズをするものじゃあないとか、何事も男性が優先なのだ、と言

い張る素直な人もいる。断わっておくが私が言ったのではない。この最初の子が水蛭子で、ちなみに第 2 子は淡島神だが、水蛭子は葦の舟に乗せられて流されたという。こういった話は世界中にあって、有名なのは『旧約聖書』にでてくる「モーセの誕生」も同じように葦の舟に乗せられてナイル川に流された。なお、モーセはエジプトからユダ(ヤ)族などヘブライ 12 部族を連れて、神から約束された「カナンの地」(現イスラエル)を見下ろせる「モアブの丘」(現ヨルダン)で 120 歳の生涯を閉じるが、モーセは天空を駆ける舟に乗って日本に来て、583 歳で亡くなったという説がある。石川県押水町にある宝達山の三つ子塚古墳がモーセの墓だといわれているが、これが神話に出てくる神々が住む「高天原」の外国説の根拠になっている。

話はどんどん脱線していくから、この辺で今回の講義を終了する。